

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学農学部3年 後藤 優理子

① 学習成果

私は今回のプログラムを通して、実際に現地に赴いて言語や文化の学習を行うことはとても有効であると感じた。

自分は、海外で現地の学生と交流する機会が初めてであった。語学はそれほど得意ではないが、最初はある程度のコミュニケーションはできるだろうと予測していた。しかし、特に *Doing business in Europe* の講義でグループワークをした際にはコミュニケーションの難しさを感じた。中学や高校で英語の勉強をしたものの、日常会話にはやや不向きな表現であったり、学習した単語のうち、適切なものを瞬時に選択することが困難であると感じた。その中でも特に、相槌が最も困難であると感じた。会話をスムーズに、快適に進めるためには相槌は必要不可欠であるが、実際にそのような表現を学習する機会は、自分から設けない限りなかったように思う。テキスト上だけではなく、生身の人間と会話して学ぶことの大事さを改めて認識した。

また、正直なところ私は、言語の学習のために海外に行くことは重要でないと考えていた。グローバル化が進んでいる世の中で、オンラインの会話教室など、日本にいながら勉強する手段はいくらでもあるからだ。しかし、今回のスプリングスクールでスペインに滞在する中で、実際にその国に行って言語を学ぶことの利点を感じた。日本でスペイン語を学習しているときよりも感覚的にスペイン語を学習することができたと思う。例えば、スペインの街では *Salida* という表記をよく見た。日本で勉強すると *Salida* は出口だと日本語に変換して理解する必要があるが、実際に体験で学ぶと瞬時に単語から意味を理解することができた。

今回のプログラムを通して、最も触れられたと感じたスペインの文化は、食文化である。例えば、2週間自分の食事を調達する中で、パン屋さんが多く、その値段も手軽であることに気づいた。スーパーで販売されているパンはさらに安く、日本で買うよりも手軽に手にすることができた。パンが人々の主食として生活を支えていることを身をもって感じた。

また、私は世界史を選択していなかったため、西洋の歴史に疎いが、今回のプログラムで街の景色からスペインの歴史を見ることができ、勉強になった。特に、バルセロナの中心地からやや離れたコロニアグエルを見に行った際には、綿産業により形成された古い街を同時に見ることができた。体感しながら歴史を学ぶことは、実際に現地を訪れて初めてできる経験であり、とても感動的だと感じた。

プログラム中ではスペインの人の他、異なるバックグラウンドをもつ様々な人と話をすることができた。異なる人を知ることで自分のことを相対化し、より客観的な視点を獲得することができたと思う。

今回のプログラムを経て、海外への興味が増すとともに、長期的な海外滞在へのハードルが下がった。特に、食事や治安などについて自分が必要以上に警戒していたことがわかった。学部生のうちの留学は難しいかもしれないが、大学院での交換留学、社費留学や海外赴任などを経験できるような職業への就職も検討したいと思っている。